



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

であい

留学生地域交流事業 2019 「留学生ふれあい交流 in とかち」

留学生が北海道の地方に赴き、その地域の文化体験や住民と交流する令和元年度留学生地域交流事業「留学生ふれあい交流 in とかち」が、8月12日(月・祝)～14日(水)の日程で十勝管内の大樹町、更別村、帯広市等で実施され、21か国・地域 21名の北海道内の留学生が参加した。

1日目、一行は大樹町へ。まず、大樹町の担当の方から、JAXA(宇宙航空研究開発機構)や町、企業が取り組む「宇宙のまちづくり」の説明を聞いた。次に、同町発祥の生涯スポーツ「ミニバレー」を体験し、地元の方とも交流し、留学生同士も打ち解けていく良い機会となったようだった。夕刻には更別村へ移動し、西山更別村長をゲストにお迎えしての夕食交流BBQが和やかな雰囲気の中で開催された。留学生は、地元産の牛肉、鶏肉、ジンギスカンや野菜などの他、地元の方のご厚意でいただいた特産品のチーズや牛乳、うどんなどをいただき、何を食べても美味しい夕食に感激した様子だった。特に、西山村長自らが留学生のいる各テーブルを回り、一人一人に気さくに話しかけていただくなど、たくさんのおもてなしに、留学生たちの緊張もほぐれ、夕食交流会を大いに楽しんでいた。



ロケット前でポーズをとって気分は宇宙飛行士

2日目は、前日と違って変わった十勝晴れの下、早朝から幕別町発祥の「パークゴルフ」を体験。初心者でも楽しめる生涯スポーツを体験し、程よく汗をかき爽快な気分。その後、旧北海道開発局事務所の施設をリノベーションし活用している複合商業施設「熱中 CAMPUS SARABETSU」にて、西山村長による“授業”を受けた。村の概要や農地面積が日本トップの大規模農業地帯である等のお話があり、特に、最先端技術を駆使したスマート農業の取組の話題に、留学生は強い関心を抱いていた。

昼食後、同村の特産品の一つであるすもも畑も視察。収穫されたばかりのすももの選別作業から見学し、採れたてのすももをご馳走になり、旬の味覚を大いに味わった。次に、日本最北端にあり、国内で2番目の規模を誇る国際サーキット場「十勝スピードウェイ」へ。支配人の方からのお話を聞いてからコースに降り、間近でデモ走行を見学。レーシングカーの迫りに全員が釘付けとなっていた。



本物のレーシングカーの迫りに一度大興奮

夕方からは、今回のバスツアー最大の目玉である「勝毎花火大会」へ。(株)勝毎光風社のご厚意で特等席を確保いただき、音、光と花火が織りなす、迫力ある芸術的な花火を、留学生は驚きと感動の連続の中、圧巻のフィナーレまで鑑賞。ミャンマーからの留学生は「今まで4回花火大会に行ったが、今回が人生で一番の花火大会だった」と興奮気味に語っていた。最終日は、中札内村にある「六花の森」を視察し、十勝管内の魅力を十二分に堪能し、札幌への帰路についた。

留学生が北海道内の様々な地域を訪問し、その地域特有の産業や文化に実際に触れられ、さらに地域の方や留学生同士が交流を深められることができ、主催者が期待する以上の充実の3日間のプログラムとなった。



西山更別村長の音頭で歓迎会がスタート

ハイエック主催多文化共生講演会
「誰もが暮らしやすい地域づくり
～多文化共生と災害時対応～」

6月14日(金)
千歳市民文化センター

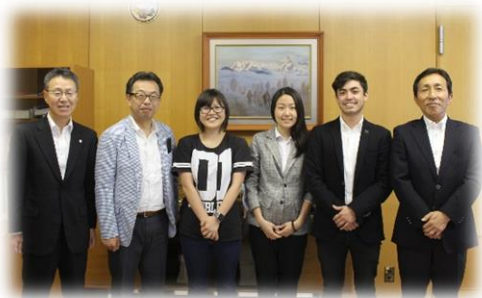
ハイエックでは、地域で生活し、また地域経済等を支える外国人を道民の一員として認識し、外国人も暮らしやすい地域づくりを推進する「多文化共生事業」を10年以上にわたり取り組んできた。今回は、北海道の空の玄関口である千歳市において「誰もが暮らしやすい地域づくり～多文化共生と災害時対応～」と題し、(一財)ダイバーシティ研究所代表理事の田村太郎氏を講師に迎え講演会を実施し、石狩管内の市町村職員や千歳国際協会関係者などが参加した。

北海道の全人口に対する外国人の率は約0.6%と決して高くはないが、冬季にはサービス業に従事する外国人数が上昇し外国人率が10%を超える町村があるなど地域によって状況は異なる。また、北海道を訪れる外国人観光客数を2007年と2017年で比較しても、10年間で約4倍近く増加するなど、どの地域においても、外国人を見かける機会が増えている。

今回の講演のテーマの一つである災害時対応について、まず、日本を訪問また滞在する外国人は地震などの災害そのもののリスクや避難所でのように行動すればよいのかなどがわからない等、日本人側の「理解不足」による、災害時に直面する外国人ならではの課題について説明があった。

特に、2018年9月の「北海道胆振東部地震」時に、札幌市が開設した「観光客向け避難所」の話題もあり、千歳市でも実際に観光客への対応や説明等が求められたことなどから、参加者は多様な災害想定に基づいたシミュレーションの必要性を痛感していたようだ。

その後、講師からは、多様化が進む日本での外国人の様子について最新のデータを基に説明もあった。今後、特に人材不足が見込まれる業種においては、外国人材の受入は喫緊の課題であり、特に第一次産業をメインとする北海道では、都市部に限らず地方においても外国人材の受入促進の必要がある。しかし、それは日本に限ったことではなく、国境を開ければ日本に外国人が来るというのは昔の話という発言は、参加者にとってもインパクトがあったようだった。



令和元年度

北海道出身海外移住者子弟留学生 北海道海外技術研修員(2名) 来道

左から3番め 鈴木カーレン小音里さん ブラジル連邦共和国
右から3番め 嶋倉土田みどりクリスティナさん パラグアイ共和国
右から2番め 松原ニコラスレオナルドさん アルゼンチン共和国

令和元年度ハイエック受入の北海道出身海外移住者子弟留学生は4月15日に、北海道海外技術研修員は6月2日に来道し、それぞれの専門の勉強をスタート。各事業の実施期間は来年の3月までとなっている。

【北海道出身海外移住者子弟留学生 鈴木カーレン小音里さん】

鈴木さん(ブラジルバストス市在住)は、札幌市出身の祖父を持つ日系3世。サンパウロ連邦大学を2018年に卒業し、その後、この留学プログラムに参加。なお、この留学が人生で初めてブラジル国外を出ての来日となる。翌年3月まで、北海道科学大学工学部情報工学科で「ゲームのNPCの健康状態や目的よっての行動を判断するAIの開発」をテーマに学ぶ。将来的にはAI技術を駆使した自作のゲームを作ることと人生で初めて見る雪をとにかく楽しみにしていると、目を輝かせて語っていた。

【北海道海外技術研修員 嶋倉土田みどりクリスティナさん、松原ニコラスレオナルドさん】

嶋倉さん(パラグアイ・イグアス市出身)は、母方の祖父母が月形町と夕張市出身の日系3世。2015年度パラグアイ青年交流団として1週間ほど来道経験があり、今回が2回目の来道。エステ国立大学の法学科を卒業し、パラグアイの弁護士資格を取得。今回は「法学」を学ぶため、北海学園大学法学部で研修を受ける。以前に地域の日系移住者の方に、手続きについて日本語で思うように説明できなかった苦い経験があり、「日本で少しでも法律のことを学びたい」という思いを抱き、このプログラムに応募したと強い思いを口にしていた。

松原さん(アルゼンチン・エスコバル市出身)は、祖父母が札幌市出身の日系3世。母国の大学と大学院で「経営学」を学んでいたが、2017年から料理について学び始め、翌年からブエノスアイレス市内の日本料理店で寿司職人のアシスタントとして勤務した経歴を持つ。3月まで宮島学園北海道調理師専門学校で「調理技術(日本料理)」を学ぶ。「経営学の知識も生かし、将来は自分のお店を開きたい」と意気込みを語っていた。なお、松原さんは現地北海道人会から預かってきた北海道胆振東部地震への義援金を持参し、北海道総合政策部国際局の山田国際課長に贈呈。山田課長からは現地の方から心のこもった思いに対し謝辞があった。



義援金を山田国際会長に渡す松原さん(右)